東方三柱神

霧夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方三柱神

【Ｎコード】

Ｎ９９６４Ｚ

【作者名】

霧夜

【あらすじ】

ある日、某ゲームをやっていた三人組の前に闇魔様が現れて・・・。東方の世界に転生した三人だったが、そこで一匹のボロボロになった狐を助けたら何と、その狐は、転生した時代では珍しい妖狐だった！

この小説は、東方の二次創作小説です。独自解釈や、二次創作要素が大量に含まれます。苦手な方や、「目が腐っちまう。」という方は、ブラウザバックをおすすめいたします。基本駄文です（＾ｗ＾；）

第一話　三柱、大地に立つ！（前書き）

どーも。霧夜です。また新しい小説書いちまった。大丈夫かな？
ｗｗｗ

第一話　三柱、大地に立つ！

ある日、ある部屋で三人の少年が遊んでいた。やっているのは、P○Pゲームである「地球防○軍2」である。

「くそ！また、僕が先にですか？これで、最初に殺されるの三回目だよ！？」

「だって、お前弱いんだもん。」

「てか、戦車砲直撃とか・・・ウケル～！！」

三人は、対戦モードで遊んでいた。しかし、そこにある一人の人物が現れた。

「コホン・・・。そなたたち少しいいk『うわ～～～～～～！！『・・・。」

「おま、ちょ！ライサン○ーZで狙撃は反則だろ！体力設定３００ちょっとで勝てるわけねーじゃん！？」

「いや、いきなり飛び出してくるから・・・てっ、ギャー！！」

「やりーｗｗｗ」

「ちょおま、ジェノサイド○ャノンは反則すぎるだろう！？」

「使っちゃいけないなんて言われてないＺＥ☆ｗｗｗ」

「確かに言ってない気がする～。」

「あると思います。」

「「ちょ、おまｗｗｗ」」

「・・・。そなたら話を聞かんか～～～～～！！！！！！」

「で、闇魔様が何の変哲もないただのクサレゲーマーの俺たちに何のご用でしょうか？」

「お前・・・。それ自分で言ってどうする？」

「てか、微妙におれっちらも巻き込むな！」

「お前、その変なの治らないの？」

「だまらっしゃい！！」

「そなたら、人の話を聞かんか～～～！！」
「「「すいませんでした～！！」」」
その時の三人は、見事なｏｒｚの形で頭を下げていたという。

・・・閻魔様御説明中・・・

「・・・。つまり、手違いで俺たちに神気が宿ってしまったと？」
「まぁ、そういうことになるな。」
「で、僕たちはどうなるのですか？」
「そうそう、おれっちもそれが聞きたかったんだ。」
「まぁ、そなたらに相応しい世界に転生という形になるであろうな？」
「俺たちに相応しい世界・・・。！！あるじゃん！」
「「「へ？」」」
「東方の世界！！」
「ぶっ、確かにいいかもしれないけど・・・。」
「大丈夫なのか？」
「まぁ、それを望むのであればさっそく準備してしんぜよう。」
「「「あざーす！！」」」
「微妙に腹立つのう・・・。」

・・・数刻後・・・

見事に三人は草原にぽつんと立っていた。
「なぁ・・・。」
「なんだ？」
「どうした？」
「俺達さぁ・・・東方の過去の世界に転生させてって頼んだっけ？」
「・・・いや・・・。」

「たぶん頼んでない・・・・。」
「「「・・・。」」」
しばらく沈黙が三人の間に漂った。
「まぁ、神気を持ってるってことは俺たちは神になってる？ってことなんだ！生き抜いてやろうぜ！！」
「「そうだな！！」」
「じゃぁ、お決まりのあれ言うぞ！！」
「「おぉ！！」」

「「「新世界の神になる！」」」
三人とも・・・もう神だよ・・・。ｂｙ作者

第一話　三柱、大地に立つ！（後書き）

今回は、ここまでです。誤字脱字などありましたら、お気軽にコメントで指導してください。

第二話　狐がボロボロだ、あなたならどうする？助ける？それとも見捨てる？そ

サブタイトルが長すぎる・・・。ｏｒｚ二話連続投稿でございます。
妖狐ですが・・・。藍さんではありません。まだ、いないはずです
ので＾＾；

第二話　狐がボロボロだ、あなたならどうする？助ける？それとも見捨てる？

あれから数刻後三人は森の中を歩いていた。とりあえず、歩いてみようという事で歩いているのだが・・・。見つけたのは大きめの洞穴一つである。

「俺達なんも見つけられないな・・・。」

「いや、そういうもだろ。都会では、考えられないことだけど。」

そう、この三人は東京住まいであったために何もないという状況が普通では考えられなかった。

「・・・。！？おい、あの草陰のとこ！！」

「「ん？」」

「なんか倒れとる！！」

そう、草陰のところに何かが倒れているのである。

「どれどれ？・・・てっ、狐じゃん・・・。」

「狐だな・・・。」

「それにしても、ボロボロやな。」

「とりあえず、どうする？」

「よし、ここは、落ち着いて保健所に連絡しようか・・・。」

「いやねーから。」

そう、三人がいるのは縄文よりもはるか昔である。そんなところに、保健所や電話などがあるはずもなかった。

「じゃぁ、どうする？」

「・・・ほっといて死なれるのもやだし、さっきの洞穴につれて帰ろうぜ。」

「「・・・わかった。」」

・・・数刻後・・・

狐ｓｉｄｅ

私は、今見覚えのない場所にいる。先日尻尾が三尾になってうろついていたら、蜘蛛のようなやつに襲われてここまで、ダメージを負ってしまいました。とりあえず、ここは、そこなのでしょう？見たところ洞穴のようですが・・・。ここが、あの蜘蛛もどきの巣という可能性５０％、誰かに助けられた可能性０％、死の世界という可能性２０％、夢の可能性３０％・・・これが能力で計算した結果です。私、食べられてしまうのでしょうか？

狐ｓｉｄｅｏｕｔ

「いやー。大量だな。」
「この木の実食えるのか？」
「まぁ、俺たちは死なないだろうし、動物も生命力が高いというから大丈夫だろう・・・たぶん。」
「おい、今たぶんって言ったろ！」
そんな事を言いながら狐はすでに起き、怯えていた。
「お！目が覚めたか？・・・大丈夫だ。安心しろ俺たちは、敵じゃない。」
すると、狐が震えながら
「ほ、本当？」
まるで、か弱い少女のような声でしゃべったのである。
「「「狐がしゃべった！？」」」
三人は、マジでびっくりしていた。

「助けていただきありがとうございました。」
「いやいや、それよりも人化はできない？」
「人化・・・ですか？」
「そうそう、なんか落ち着かなくてさ・・・。」
「・・・やってみます。」

すると、狐が光を発し光が収まるとそこには白い着物を着て獣の耳と、三尾の尻尾を携えた少女・・・ではなく幼女が座っていた。
「「「「えぇ～～～～！！！」」」」
「え、えっと・・・どうされました？」
驚いている三人に妖狐は完全に引き気味になっていた。

「えっと、まぁ、俺は山田陸（やまだりく）だ、能力は『銃火器を創造する程度の能力』を持ってる。よろしくな！」
「僕は、上杉天斗（うえすぎあまと）、能力は『湿気を司る程度の能力』だよ。よろしく。」
「おらっちは、上条優麻（かみじょうゆうま）だ。能力は『炎を操る程度の能力』だ！よろしく！」
「え、えっと白尾楓（はくびかえで）といいます。能力は『式を操り、司る程度の能力』です。こちらこそ、よろしくお願いします。」
「それで、君はこれからどうする？」
「あなた方に助けていただいたのも何かのご縁でしょう。共にいさせてください！」
「「「ん、まぁいいよ。」」」
「ありがとうございます！・・・ところで・・・あなた方のその力は？」
「ん？あぁ、神力のこと？僕たちは、神だよ。」
「えぇ～！！！！」
こうして、三柱に白尾楓が仲間に加わったのであった。

第二話　狐がボロボロだ、あなたならどうする？助ける？それとも見捨てる？

今回、少し無理やりすぎたかな？

現状でのキャラ紹介（前書き）

『現状での』となっていますが、能力が変わったり、増えたりするくらいで、人数が増えたりすることはないと思います。というか、増えられても困るｗ

とりあえず、求聞史紀風に書いてみました。しかし、目撃報告例は、まだ書けません。二つ名は一応決まっているので書きます。

ちなみに、神という項目は、求聞史紀の［八百万の神］の部分を使おうか迷いましたが、自分で勝手に作ってみました。

現状でのキャラ紹介

［神～絶対の存在～］

近代風の軍神

山田　陸ｙａｍａｄａ　ｒｉｋｕ

能力　　銃火器を創造する程度の能力

危険度　　高

人間友好度　　高

主な活動場所　　不明

主な活動場所を持たず普段は、二人の神と一匹？の妖獣と共に旅をしている軍神である。元人間だというが現人神（あらひとがみ）ではないため疑わしい。なお、神なのに友好度は非常に高いという変な神の一柱である。また、危険度が高いため注意が必要である。

普段、普通に話していれば攻撃されることはない。むしろ、神なので攻撃などすれば信仰が減ってしまう。しかし、無礼なことを言うのは非常に罰当たりであり、近くにいる妖獣の攻撃対象になりかねない＊ので注意が必要である。

？対策？

普段は、他の神にするような態度でも怒らすことはない。むしろ、そちらの方がいいらしいので、そうしていれば大丈夫であろう。もし、攻撃された場合、こちらに非がないのであれば、誤って逃げるか近くにいるはずの妖獣に助けを求めるとよいだろう。

＊どちらかというと妖獣の方が怖い。

湿度を司る神
上杉　天斗ｕｅｓｕｇｉ　ａｍａｔｏ

能力　　湿度を司る程度の能力
危険度　　高
人間友好度　　高
主な活動場所　　不明

こちらも同様の、神である。人間友好度が高く、軍神よりも話しやすいかもしれない。普段は、ツッコミ役というもので、二柱によくツッコミを入れているのが見受けられる。

能力自体は、聞いただけでは弱そうだが、危険度は、高いようだ。

？対策？

こちらから手を出したりしない限り絶対に向こうから襲い掛かってくることは、まずない。暴れていたとしてもそれは、ただのストレス発散なので、見守るだけにしたいところである＊。

＊近づくと巻き込まれる可能性が高い。

炎を司りし神
上条　優麻ｋａｍｉｊｉｙｏ　ｙｕｕｍａ

能力　　炎を司る程度の能力
危険度　　極高

人間友好度　　極高
主な活動場所　　不明

二柱に同じく旅をする神である。かなり特殊な一人称だが、彼は特に気にしていないようだ。人間友好度は、特に高いが、彼は、能力ゆえに危険度がとても高い。

特に問題では、ないが彼はとても熱い神である。能力が原因なのか、それとも本来からそういうものなのか分からないがとにかく熱い。

?対策?

明るい性格なので、ほとんど気を崩すことがないので安心して話をするといいが、一つ注意しなければならないことがある。それは、彼が熱くなっているとき、怒っているときは絶対に彼に触れてはならないということである。体が熱くなり体表面の温度が大変な値＊になるからである。火傷をしたくなければ絶対に触れないことをおすすめする。

＊一緒にいる妖獣の計算では、約６００℃が最高であるとのこと。

［妖獣～力と知恵を持ちすぎた動物～］

神を守りし白狐
白尾　楓ｈａｋｕｂｉ　ｋａｅｄｅ

能力　　式を操り、司る程度の能力
危険度　　高
人間友好度　　普通

主な活動場所　　不明

三柱の神と共に旅をする妖狐である。元が白い狐だけあり白い着物を身にまとっている。ただ、チャームポイントは首に巻かれた黒色のマフラーであろうか。とても印象的である。

式にかかわることは、すべて使えると言っては過言ではない能力を持っているが、三尾の為まだほとんどが使えないでいるのが現状である。

?対策?

特に、こちらから手を出さなければ向こうから襲い掛かってくることは、まずないと考えていいだろう。もし、怒らせてしまっても自分の非を認め、素直に謝れば快く許してくれるが、誤らなかった場合式神を大量に散布し、暗い笑顔＊で排除しようとしてくるので注意が必要である。

＊一生トラウマになりかねない。

現状でのキャラ紹介（後書き）

次回から、本編に戻ります。永琳登場まであとどのくらいだろうw

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9964z/

東方三柱神

2011年12月31日00時45分発行